

メープルレター（104）

やや春めくと思いきや

日本では桜もちらほら。。。のころ。こちらは、一時10度近くなり、春かと思いきや、今冬最悪のアイスストームがくると聞き、マダム田中は、食料買い出しに走りだし、疲れきっております。ぶ厚いコートをはんの2日間、薄手のコートに変え、ルンルンで歩いていたのですが。。。一夜あけ、アイスストームの今日は、会社命令で在宅で仕事の人も多く、学校も閉鎖になりました。

アイスストームになると、一瞬にしてあたり一面がアイススケート場のように氷に覆われてしまいます。転ぶのなんのって、もうゴロゴロ芋虫をした方が良さそうになります。

と、笑ってられないの現状です。義理の次男の嫁は、アイスバーンで滑って転んで顔面滑降。くるぶしの一部が外れ、三か所骨折をしました。1月半ばの話です。それ以来治療ブーツを履き、松葉杖をついて暮らしています。もう二ヶ月になります。もうあと一月この状態が続くようです。骨折が治り、リハビリをするようになっても、完全に治るまでには、かなり長い時間がかかりそうです。家族の暮らしは一辺しました。次男は責任の重い大学の仕事の傍ら、嫁の病院やリハビリの送り迎え、子供達の世話、家事など、休む暇もないようです。顔面滑降のせいか、顎にも影響がでて、歯並びが少し変わったのか、歯が痛み、歯医者通いもすることになりました。次男はその送り迎えもすることになりました。次男の長男は学校に出かける前に、自由に動けない母親のためにお弁当を用意しています。あーなんて優しい子なのでしょう。あの金髪の16歳のイケメン（いえ、先日17歳になりました）が、かいがいしく母親の弁当作りをしているのです。

嫁は、エキセントリックなフランス人なので、パニックに陥り、ヒステリーも起きているようです。カリブ海の浜辺でバカンス以外は興味がなく、頑張らないキャラなので、生まれて初めての試練になりました。一般的に、フランス人は文句は言っても自分とは戦わないようです。皆が心配したのは、嫁の怪我より、嫁の世話をけなげにする次男のことでした。

「今度モントリオールに行く用事があるんだけど、そっちに寄ってもいい？」

あーこの子は疲れているんだ。。。息抜きがしたいんだろうなあ。。。？

「大歓迎よ、待ってるわ。簡単な事しかできないけど、おしゃべりしよう。」

「僕の従兄（ドリトル先生の甥）がマルチニクからこっちに遊びにくるから飛行場まで迎えに行くついでに（ケベックからは遠いモントリオールの空港なのですが）寄るから。」

「あら、久しぶりだわ、彼と会うのは」

次男、次女の長女、ドリトル先生の甥がやってきて、歓談と軽食で昼を過していると、次男に嫁から電話がかかってきました。

「さっきもかかって来たばかりなんだ。」

娘に代わって出してもらい歓談が続きしました。そういえば、嫁は電話魔で、日に5－6回は次男に電話をかけていたのを思い出しました。

次男は独身貴族のドリトル先生の甥と仲が良く、頻繁に行き来をしているようです。今回は、甥は学校の中休みの次男の子供達をつれてスキーに行くようです。次男によれば、

「車で30分も行けば、セントローセンス河を見下ろすスキー場があるんだ。木立の間をずっと滑って降りられ、なかなかダイナミックなんだ。」

なるほど、写真をみても、なかなか素敵なスキー場です。

「子供達が喜びそうね。」

「僕はその間、学生たちの中間試験の採点をするから。。 やっと少し時間が出来そう。。」

その甥も、そろそろ、バカンスを終え、マルチニクへの帰途につくことでしょう。9月からは、ニューカレドニアに転勤になるようです。

「僕はどこにでも飛んでいかれるから。本当はタヒチに行きたかったんだけど、ニューカレドニアでも嬉しいよ。ダイビングもできそうだし。。 楽しみだなあ。」

50半ばをとうに過ぎ、白髪が多くなった、住処を定めないドリトル先生の甥は今度は遙かニューカレドニアでしばらく暮らすようです。幸せとは言えない最後を迎えた母親の話を一言もしない甥の背中を眺めながら、ドリトル先生は深いため息をついております。

「これがの50歳半ばをはるかにすぎた男のすることなのだろうか。。 世界を回っても、何も足跡の残らない生き方が悲しい気がする。」

と、こんな訪問が過ぎた翌日は、義理の長男の4歳の娘を預かることになりました。

「ワインのテイastingがあるんだ。子供は連れていられないから。。 2時から4時まででいいから。」

とんでもありません。30分早く着き、迎えに来たのは、予定より2時間も遅かったのです。良い子にしたかですって。とんでもありません。大半は泣いていたのです。おもちゃも遊ぶものも何ももってこず、テレビもみません。見るのは、スマホの動画だけです。モンスター娘と言われ、預かる人泣かせの悪評の訳が分かった気がします。夜はきちんと寝ず、食事もきちんとせず、いつも興奮している状態と言ったらよいかもかもしれません。不思議なことに、長男も嫁もこの子の状態を意識してないらしく、人の意見も聞かず、子供がぐずるのは預かる人のせいと思っているようです。この日も朝から何も食べていず、出しても何もたべたがらず、食べる物はバニラアイスクリームのみです。冷凍庫を開け、勝手に出して食べています。母親ですか？母親は、テニスチャンピ

オンの夢が忘れられず、週四回、仕事の後、夜練習をし、週末は連日試合です。長男は、嫁の為にひたすらベビーシッターと家事を担当しているようです。仕事に成功し、人も羨む金持ちなのに、ライフスタイルを持たず、何故か貧しい暮らし方をしているようにも見えます。長男の背中を見て、ドリトル先生はまた深ーいため息をつきます。

「あーこれが40半ばの経済力のある男の生き方なんだろうか？子供のベビーシッター以外はすることがないのか。人を雇って任せればいいだろうに。」

そうそう、食事情が悪く落ち着かないスマホの動画のみの子は、案外多いらしく、学校のクラスの三分の一はこんな症状で、朝晩精神安定剤を飲んでいると、12歳の孫娘が言っていました。

最後の訪問客は、週半ばにデイズニーワールド号でクルージングバカンスを義理両親と過ごす娘の黒猫でした。12日間預かることになっていました。娘たちはフロリダまでは飛行機で行き、そこから船に乗ります。4千人の乗客に1500人のクルー、かなりの大型船のようです。カリブ海のバージン島やデイズニーの持ち島などにより1週間のクルージングです。船の中では子供むけのイベントがいくつも生まれ、アニメのキャラクターと写真を撮ったり出来るようになっているようです。GPSのブレスレットをつけ、あちこち回る子供達のイベントもあるようですが、孫娘はひたすら、立ち寄った島の浜辺で砂遊びしていたようです。何より喜んだのは初めて乗る飛行機でした。飛行機があちこちにある空港の風景に興奮し、窓から見る雲の上の光景にも目を丸くしていたようでした。

さて、預かっていた黒猫は、何とも賢い猫でした。目覚まし時計のように、毎朝6時（7時半と娘から聞いていたのですが、勝手に変更）に、

「餌ー」

と言って鳴き、餌のおいてあるカウンターに飛び乗るのです。この猫のリズムがあるらしく、食べ終わると、

「遊んで」

と、猫おもちゃのある所に座りこみます。それだけではなかったのです。慣れてくると、お気に入りのおもちゃをくわえてやってきて、ポトリとマダム田中の前に落とし、お尻をふりふり、お気に入りの場所に向かって歩いていきます。

「ここで、これで遊んで」

ということらしいのです。ドリトル先生によると

「犬はおもちゃをくわえてもって来るけど、おもちゃをくわえてもって来る猫というのは初めてだ。」

黒猫は賢いと良くいわれますが、魔女の宅急便の黒猫のようでした。マダム田中は完全にこの黒猫にこき使われていました。12日目、猫バカンスの終わりは、受け入れがたかったかのか、黒猫は家の中をやや30分ほど走り周り、婿殿は捕まえてケージに入れるのに悪戦苦闘しておりました。

一連のミッションインポッシブルをやっと終わったところです。